『日本書紀』とその注釈語について

2007.06.01～2008.05.13更新

萩原　義雄

『日本書紀』とその暗号の語

『日本書紀』神武紀〈諷歌〉〈倒語〉
『日本書紀』崇神紀〈諷歌〉
『日本書紀』神功紀〈誘言〉「おこつりごと」「あざむくこと」
『日本書紀』雄略紀〈隠文〉
『日本書紀』敏達紀〈秘密〉
『日本書紀』推古紀〈間諜〉
『日本書紀』皇極紀〈童謡・詩歌〉
『日本書紀』斉明紀〈童謡〉
『日本書紀』天智紀〈童謡〉
『日本書紀』天武紀上〈合言葉〉
『日本書紀』天武紀下〈無端事（難問）〉

『日本国語大辞典』第二版における記載内容

さかしまごと【逆言】〔名〕「さかさことば（逆言葉）」に同じ。＊書紀〔七二〇〕**神武元年正月（北野本室町時代訓）**「能く、**諷歌、倒語**を以て、妖気を掃蕩へり」＊方術源論〔一八二二〕「倒語は、たふしごとと読むべし〈古訓、さかしまごととあれど、ただ、字になづみたる訓みざまにて、心得がたし〉」【発音】サカシマト鎌倉【辞書】言海【表記】倒語○言

そえうた［そへ…］【諷歌】〔名〕思いを表面に現わさず他の事にことよせて歌った歌。＊書紀〔七二〇〕**神武元年（熱田本訓）**「密策を奉承て能く、**諷歌・倒語**を以て妖気を掃蕩す」特に、「古今集」で、和歌の六義の一つ。「詩経」の六義の一つの風になぞらえたもの。＊古今〔九〇五～九一四〕仮名序「そもそも、歌のさま、六なり。からの歌にも、かくぞあるべき。その六種の一つには、そへうた」＊和歌無底抄〔鎌倉後か〕九「例へばそへ歌と申すは、わがこころざして言はむと思ふこと、少しも言葉には言ひも出さで、それにさ似たるものをよみ出して、そこよりみする時、題はしらるべき歌なり」＊ささめごと〔一四六三～六四頃〕上「風　そへ歌の心　名は高く声はうへなし郭公〈救済〉二条の太閤さまを郭公にそへて称揚したてまつるなるべし」【発音】鎌倉【辞書】言海【表記】諷歌○言

いんもん【隠文】〔名〕はっきりとは見えない文様。また、その織物。図様を線刻した毛彫り。石帯の銙などに用いる。＊延喜式〔九二七〕四一・弾正台「凡紀伊石帯隠文王者、及定榴石帯参議已上、刻鏤金銀帯及唐帯、五位已上並聴著用」＊西宮記〔九六九頃〕一七・列見定考「公卿隠文、螺鈿剣、靴〈軽服不レ著二吉服一〉大臣家大饗、王卿著二隠文一帯二螺鈿剣一」＊餝抄〔一二三八頃〕中「有文　或称二隠文一有二巡方一円友」【発音】【辞書】色葉【表記】隠文○色〔子見出し〕いんもんの帯石帯の一種。石に彫刻の模様があるもの。有文の帯。＊桃花蘂葉〔一四八〇〕束帯色目「帯。有文をば陰文の帯ともいふなり」

おこつ・る［をこつる］【誘】〔他ラ四〕うまい事を言ったり、したりして人をあざむき誘う。また、御機嫌をとる。とり入る。＊書紀〔七二〇〕神武即位前戊午年一〇月（熱田本訓）「盛りに宴を設けて虜を誘て取れ」＊源氏〔一〇〇〇一～一四頃〕夕霧「此の文のけしきなくをこつりとどむの心にて、あざむき申し給へば」＊観智院本名義

抄〔一二四一〕「誘　コシラフ　サソフ　アザムク　オコツル」【方言】だまして誘う。おこつる高知県862福岡市898大分県大分郡939おこづる尾州†020大分県大分郡939からかう。なぶる。また、ばかにする。おこつる徳島県美馬郡810香川県三豊郡829愛県840高知県862佐賀県唐津市893大分県南海部郡939おこづる佐賀県887よけいな手出しをする。おこつる大分県938手間を省く。間に合わせにする。また、怠ける。おこつる長野県480481ものごとをわざと引き延ばす。意識して遅らせる。おこつる東京都南多摩310神奈川県津久井郡316おこづる静岡県榛原郡541あいまいにする。おこつる静岡県安倍郡540起こす。また、思いたつ。おこつる山口県豊浦郡798それとなく要求する。おこつる長崎県壱岐島「おこつっち酒を出さする」914【語源説】ヲキツレル（招列）の義か〔名言通・和訓栞〕。ヲキツル（招釣）の転か〔大言海〕。ヲコスル（烏呼為）の転〔言元梯〕。ヲコヅル（転絃）の義か〔海録〕。【発音】後世をこづるとも。平安【辞書】色葉・名義・和玉・伊京・言海【表記】棍○色○名○玉機○色○名○名○玉誘○名○言緘・権○色・○名○伊

おこつり〔をこつり〕【誘】〔名〕（動詞「おこつる（誘）」の連用形の名詞化）あやつり。仕かけ。＊観智院本名義抄〔一二四一〕「機　オコツリ」＊伊呂波字類抄〔倉〕「機　ヲコツリ」【辞書】名義【表記】機・権○名

うかゝみ【窺見・間諜】〔名〕（「うか」は窺（うかが）うの意、「み」は見ることの意）相手側の事情や動静を知るために見張りをすること。また、その人。監視人。斥候。物見。＊書紀〔七二〇〕天武元年五月（北野本訓）「近江の京（みやこ）より倭の京に至るまでに、処々に候（うかゝ）を置く」＊観智院本名義抄〔一二四一〕「間諜　ウカミス　伺見」＊塵袋〔一二六四～八八頃〕一○「候の字をさふらふとよむ、そのわいめわきまへず如何〈略〉たかき所に人をのぼせてとをき事をみするをばうかみと云ふ。候見とかきたり、うかがひみるなり」【補注】令の規定では陸奥、出羽、越後などの辺境の国に置かれた。「令義解-職員令・大国条」に「其陸奥出羽越後等国兼知二饗給、征討、斥候一」とある。【辞書】色葉・名義・言海【表記】【間諜】色葉・名義

わざうた【謡歌・童謡】〔名〕（「わざ」は何らかの意図をもって行なわれる行為の意）政治上の風刺や社会的事件を予言する意味を付加されて、民衆の間に流行する作者不明のはやり歌。もと、隠された神意が人、特に子どもの口を借りて人々に示されると考えられたことによる。童謡。＊書紀〔七二〇〕皇極二年一〇月（岩崎本訓）「時に、童謡（ワサウタ）有りて曰く」＊享和本新撰字鏡〔八九八～九〇一頃〕「謡　独歌也　徒空也又徒歌為謡是也　和佐宇太」＊大慈恩寺三蔵法師伝永久四年点〔一一一六〕五「上、宗廟の楽を備へ、下、閭里の謳（ワサウタ）に入る」＊読本・椿説弓張月〔一八〇七～一一〕続・三六回「近曾街（ちかころ）の童謡（ワザウタ）に　悪神来兮、海潮不清、悪神来兮、白沙化髭と唄（つうしよう）へり」【語源説】ワラウタ（童唄）の義〔言元梯〕。ワザウタ（神為歌）の義。神意の表象された歌の意〔大言海・文学以前高崎正秀〕。【発音】ザ【辞書】字鏡・色葉・名義・和玉・文明・言海【表記】倡○色○名○文謡○字○玉謳○名謡歌・童謡○

倭文的要素の指摘解明

※『古事記傳』四之巻〔本居宣長〕

※『書記集解』〔序文、天明五年（一七八五）、河村秀根・河村益根編〕

「愁」と「憂」（総論第八、論注例）

※『日本書紀通証』〔谷川士清編〕

『日本書紀』〔大系本〕における語の所載用例

○初天皇草創天墓之日也、大伴氏之遠祖道臣命、帥大來目部、奉承密策、能以諷歌倒語、掃蕩妖氣。倒語之用、始起乎。

《訓読文》初（はじ）めて、天皇（すめらみこと）、天基（あまひつぎ）を草創（はじ）めたまふ日（ひ）に、大伴氏（おほとものうぢ）の遠祖道臣命（とほつおやみちのおみのみこと）、大來目部（おほくめら）を帥（ひき）ゐて、密（しのび）の策（みこと）を奉承（うけたまはり）

けて、能く諷歌倒語を以て、妖氣を掃ひ蕩せり。
○於是、宰信誘言、密告埋屍之處。則王妻與國人、共議之殺宰。《訓読文》是に、宰、誘く言を信けて、密に屍を埋みし處を告ぐ。○忍熊王
信其誘言、悉令軍衆、解兵投於河水、而斷弦。《訓読文》忍熊王を誘りて曰はく、「吾は天下を貪らず。唯幼き王を懷きて、君王に從ふらくのみ。豈距き戰ふこと有らむや。願はくは共に弦を絶ちて兵を捨てて、與に連和しからむ。
○忍熊王信其誘言、悉令軍衆、解兵投於河水、而斷弦。《訓読文》○忍熊王、其の誘の言を信けたまはりて、悉に軍衆に令して、兵を解きて河水に投れて、弦を斷らしむ。
○乃顧勅道臣命、汝宜帥大來目部、作大室於忍坂邑、盛設宴饗、誘虜而取之。《訓読文》乃ち顧に道臣命に勅すらく、「汝、大來目部を帥ゐて、大室を忍坂邑に作りて、盛に宴饗を設けて、虜を誘りて取れ」とのたまふ。
○夫言貴密、事宜愼。故我之陰謀、本無預者。《訓読文》夫れ、言は密を貴び、事は愼むべし。故に、我が陰謀に、本より預ふ者無し。
○於是、宰信誘言、密告埋屍之處。《訓読文》是に、宰、誘く言を信けて、密に屍を埋みし處を告ぐ。
○秋九月辛巳朔戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬。則捕以貢之。流上野。《訓読文》秋九月の辛巳の朔戊子に、新羅の間諜の者迦摩多、對馬に到れり。則ち捕へて貢る。上野に流す。
○皇極天皇二年◆十月《卷第二十四》于時、有童謠曰、伊波能杯儞、古佐屢渠梅野倶、渠梅多儞母、多礙底騰裒囉栖、歌麻之々能烏膩。《訓読文》時に、童謠有りて曰はく、岩の上に小猿米燒く米だにも食げて通らせ山羊の老翁　是月、茨田池水大臭、小蟲覆水。其蟲口黑而身白。
※『聖德太子伝暦』下卷には、「盤上丹、兒猿米燒、米谷裙、喫而今核、山羊之伯父(いはのへに、こさるこめやく、こめたにも、くひていまさね、やましのをぢ)と記載する。

後に、山背皇子が蘇我入鹿に殺された時、この童謠歌を当時の人々が歌ったのでしょう。「岩の上に」とは、聖徳太子をはじめとする上宮王家のことを指しています。「小猿」は、入鹿の譬喩であり、「米燒く」とは、山背皇子の家を燒き討ちにすること、「山羊のおじ」とは、山背皇子の髭が山羊のようであったと解釈していたことが上記の『日本書紀』についての解釈です。

○斉明天皇六年(六六〇)十二月庚寅《卷第廿四》◆十二月丁卯朔庚寅。天皇幸于難波宮。天皇方随福信所乞之意。思幸筑紫將遣救軍。而初幸斯備諸軍器。★是歲、欲爲百濟、將伐新羅、乃勅駿河國造船。已訖、挽至續麻郊之時、其船、夜中無故、艫舳相反。衆知終敗。科野國言、蠅群向西、飛踰巨坂。大十圍許。高至蒼天。或知救軍敗績之怪。有童謠曰、摩比邏矩都能倶例豆例於能幣陀乎邏賦倶能理歌理鵝甲子騰和與騰美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理鵝甲子騰和與騰美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理鵝。《訓読文》是歲、百濟の爲に、將に新羅を伐たむと欲して、乃ち駿河國に勅して船を造らしむ。已に訖りて、續麻郊に挽き至る時に、其の船、夜中に故も無くして、艫舳相反れり。衆終に敗れむことを知りぬ。科野國言さく、「蠅群れて西に向ひて、巨坂を飛び踰ゆ。大きさ十圍許。高さ蒼天に至れり」とまうす。或いは救軍の敗績れむ怪といふことを知る。童謠有りて曰はく、まひらくつのくれつれをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりが

摩比邏矩都能倶例豆例於能幣陀乎邏賦倶能理歌理鵝美和陀騰能理歌美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理鵝甲子騰和與騰美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理鵝

まひらくつのくれつれをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりが甲子とわよとみをのへたをらふくのりかりが

1，国学者本居宣長『玉勝間』
〔甲子〕とわ響(とよ)み　尾上田(おのへた)を　雁々の食ふ　とわ響(とよ)み　尾上田(おのへた)を　雁々の食ふ　平偃僂(ひらくづま)の佃(つく)りし
押塞田(おさへだ)を　雁々の食ふ

とわよとみ
をのへたを　らふくのりかりが
みわたとのりかみ
をのへたを　かりがりのくらふ
ひらくつまの　つくりし
をさへだを　かりがりのくらふ

2，村田(平)春海・清水濱臣『齊明紀童謡考』一冊〔享和二年刊・鈴鹿文庫藏〕
摩比邏矩。まハことおこすことは、ひらくハふなてするをいふ、
都能倶例豆例。ふなつなしてきれつらめ也、下の例ハこひ来のつらめ、
弘能幣。陀乎邏賦倶。弘ハふねのトも、幣ハふねのへ、陀ハことおこすことは、乎邏賦倶ハふねのをれかへりてまへしりへになれる也、。今於と有ハ弘のあやまり也、つき／／のかなに烏と有にて於ならぬハしるし、
能理歌理鵝。能理ハふなのり、歌理ハしつをやつかりといふかりにて、やかてかちとりらをかりて、みいくさひとをいふ、鵝ハよひかけてなけくことは、つねことにいはゝ、ふなひとなり、ふなひとやりてふに同しくて、こゑかよへり、
美和陀騰能理歌。美ハことおこすことは、和陀ハうミ、騰能理ハとなりにて、うミのとなりのしらきなとをいふ、
歌ハ続歌といふへきを続をはふけり、となりのくにとやおそむき／／にならましてふなるへし、
美烏能陛。陀烏邏賦倶。かミのことハをうつしかへて、ことのとほるましきをそへたり、
能理歌理鵝。うミに同しくて、かれらとわれらといふか如し、
甲子騰和與騰。かれとあると也、更におもふに子ハ予をあやまれるにや、さてもこゝろハ同し、。子にても予にてもたゝかなのミ也、
美烏能陛。陀烏邏賦倶。能理歌理鵝。またおなし
―以下継続―

3，土橋寛『古代歌謡全注釈』〔角川書店刊〕
「背中の平たい偃僂(せむし)(百濟に派遣された津臣(つのおみ)偃僂を諷したもの)が作った山の上の田を雁どもがやって来て食う。(天皇)の御狩りがおろそかだから、雁どもが来て食うのだ。(天皇の)御命令が弱いから雁どもが来て食うのだ」と解釈する。

4，藤原要『北御所』解読例は、「甲子」を除く六十二字を対象に、重複文字の度数順に調査する方法で、度数の奇数と偶数とに二分して同種の音に二種類以上の文字を用いていることに着目した。

奇数かな
ま1　ひ1　よ1　へ3　ふ3　が3　み3　と3　く5　り7
偶数かな
つ2　れ2　わ2　ら4　た4　か4　を6　の8

※網掛けの文字のところは、同音に二種類以上の漢字表記が見られることを示す。

偶数文字「つらを」を外し、下から読む「のかたわれ」
奇数文字度数3だけを取り出し、下から読む「とみがふへ」
これを連続して「のかたわれとみがふへ」（…の片割れ冨が殖え）　残り文字を順に拾い、「つらをまひよくり」（面を毎夜繰り）

5，契沖

6，神田秀夫『斉明紀童謡遡考』

7，韓国朴炳植（パクビョンシク）『ヤマト言葉の起源と古代朝鮮語』〔成甲書房刊〕
『日本語の悲劇』〔情報センター出版局刊〕
ハングルで読む

8，伊藤邦之「暗号」〔新人物往来社『歴史読本』一九八五年特別増刊号〕を読み私信の解読
真平（まひらく）沓（くつ）の百濟（くれつ）連れ　※簡略な浅（あさく）沓の意。「百濟」は『古事記』「西の方に国有り」
大御（おお）の端（だを）男等（らふ）振（の）く詔勅（のりかり）借（か）が　※太陽の端「日本」
靈海主殿頭
神光（をだを）の端（だを）男等（らふ）振（の）く詔勅（のりかり）借（か）が
甲子と倭世急
神光（をだを）の端（だを）男等（らふ）振（の）く詔勅（のりかり）借（か）が

［課題］『万葉集』では、巻により異なる表記が見えている。次の和歌を解読してみよう。
於毛思路伎　野乎婆奈夜吉曽　布流久左尓
仁比久左麻自利　於非波於布流尓　〔巻第十四〕

妹家尓　開有花之　梅花
実之成名　左右将為　〔巻第三〕

《参考文献》
『日本書紀』〔岩波大系本〕→電子データ化「国文学資料館」の日本古典文学本文データベース に所収。